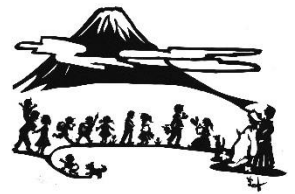


学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第3号】
平成30年
6月20日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

何を残し

伝えていけばいいのか

教育部教育総務課長

鎌野 武



つい先日のこと、畑仕事が終わって居間で仰向けに寝転んだ時、真っ黒な天井を見てふと思った。「この家も古くなつたな。ほとんど壁がなく、戸を外せば柱だけの造り。耐震性を考えると、そろそろ建て替えの時期かな。」

我が家は、昭和初期に建てられた農家の家で、玄関から勝手口まで土間、居間には囲炉裏、台所は土間に竈と流し、風呂は五右衛門風呂、便所は汲み取り式（俗に言うポットン便所）、天井が高く、お蚕を

飼えるように天井裏もかなり広い造りであった。四十年ほど前に一部改修したため、現在は土間が無くなり、囲炉裏は使用しておらず、台所と五右衛門風呂、そして便所は一般的な形になっているが、竈だけは残して今でも使っている。あと、居間と客間の天井は、かつて囲炉裏を使用していたころの名残で煙に燻されて真っ黒。柱と梁とのつなぎ目はヤニが漆喰のようになっている。おり案内丈夫かもしれない。そんな家での生活から、子ども

ものころは色々なことを経験し学んだ気がする。例えば、五右衛門風呂を使っていたころは、毎日、風呂を沸かすという手伝いがあった。なかなか火が着かなかつたり、薪のくべ過ぎで燻ってしまったりと苦労した記憶がある。いったん焚き終わると、燻がある間は冷めないが、その後は冷めるのが早い。今では簡単に追い炊きやお湯が出るが、当時は風呂の湯が冷めたり、湯が減って水を足したりした場合は、再度薪をくべて焚くこととなる。夏はいいが、冬場の夜は寒い土間に屈んでの作業であり、手元は暖かくなるもののやはり寒かった。だから、できるだけ追い炊きをしていないために、家族は順番に間を空けずに風呂に入った。風呂の湯が溢れないように浸かったりしたものだ。また薪

で風呂を焚くためには、家の周りから燃し木を集め、のこぎりや斧を使って適当な大きさの薪をこさえなければならなかった。

当時の私には日常の当たり前のことであつたが、通常では非日常の風景であり、学校では火おこしなどを宿泊研修で学んでいる。我が家では年に数回餅をつくが、そのもち米は竈で蒸かす。その竈炊きの担当は、現在は私の息子たちがやっている。幼稚園の年中ぐらいから私やじいちゃんに火のつけ方や薪のくべ方を教わり、小学校上がったころには、上手に火を扱えるようになっていた。我が家の子どもは、この古い真っ黒な天井の家を気に入っており、この家に生まれたからこそ体験ができたことをよかつたと思っているようだ。私もそう思っていた。

改めて思うのは、親から子への教えや伝えたことの多くは、日常生活の中にあるということだ。今、「家や「家族」が時代とともに形を変え、失われていくものがあることは仕方ないことだが、残さなければいけないものもあるので

はないだろうか。

真っ黒な天井を眺めながら、孫ができたとき、その子にもこの家で生活してもらえよう、何とかしてこの「家」を残しておこうと思った。

幼保こ小中教職員合同研修会と二年次幼稚園研修

指導主事 丹澤 豊志

五月十二日に国立中央青少年交流の家において、幼保こ小中教職員合同研修会が実施されました。本研修会は、御殿場市教育委員会と御殿場市役所保育幼稚園課の共催による歴史ある研修会です。今年度は、御殿場市立西保育園の折小野 真樹保育士と、御殿場市立竈幼稚園の本郷 未樹教諭が日頃の実践を発表してくださいました。また、国立青少年教育振興機構理事長の鈴木 みゆき氏による講演では、脳科学の視点から「早ね 早起き朝ごはん」の重要性を再確認しました。

また、六月五日は教職経験二年目の教諭二十名を対象と

した「幼稚園実習」が、御殿場幼稚園、玉穂幼稚園、原里幼稚園にて実施されました。各研修員は、慣れない園児の対応に苦労しながらも、幼稚園教諭の指導方法の奥深さを実感していきます。

高根小の鈴木奈央先生は、事後の感想の中で、「言葉も十分に分らず月齢による発達の差も大きい子どもたちが一つの集団として生活できるように、園児の心に寄り添って指導する姿」や「安全面に配慮しながらも、子どもの表情や動きを見のがさない姿」に感銘を受けつつも、「自分は子どもたちを見ているつもりになっただけではないか」とこれまでの指導を問い直していました。

参加した教職員にとって、「個々の子どもを見つめ教育活動を進めていくことの大切さ」を改めて見つけ直すよい機会となりました。



教育指導センターから

風薫る

共同思考ができる

学習集団づくり

教育指導センター室長

高橋 正彦

◇新しい学級・授業がスタートして二ヶ月余りがたちます。試行錯誤の毎日だったことと思えます。授業を参観させてもらうたびに、先生方の授業づくり・学級づくりへの熱心な取組に頭が下がる思いをしています。その中で「共同思考ができる学習集団の形成」と「教師の熱意」という視点から二つの事例を紹介させていただきます。

◇まず六年、友光優治学級の道徳授業です。指導内容は、節度・節制。教材は「だから言ったのに」でした。「だから言ったのに」と言う洋子の言葉をよぎった時の順一（主人公）の気持ちは？という発問を受けて、子どもたちが次々と発言をします。

「洋子の言い通りだった。」

もつと素直に聞けば良かった。「あの時、洋子の言うことを聞いていたら、しっかりと挨拶ができたのに。」同様な意見が続きます。七人目のAさんは違った見方をします。

「順一はいつも適当なので（適当にやる）くせがついてる。だから洋子に突然言われても、すぐには直せない。」
「突然じゃなくて、いつも洋子は注意している。」
「洋子はお母さんみたいに順一を心配している。」などのAさんの意見に反対するつぶやきがあちこちから出てくる中、今度はBさんが発言します。

「順一はいつもふざけている。洋子に言われて上履をしっかりと履いていたとしてもまたふざけてしまい、食器をこわしたかもしれない。」
Aさんがもう一度念を押すように発言します。

「毎回言っても直らない。ここで一回言っても直らない。」

これ以後「洋子の言葉では直らない」という十数名の子どもたちの発言が、教師の「洋子は言い過ぎたこと」という感想も混えながら続きます。そんな中で今度はCさんが、

「順一は反省をしている。一回怒らないとまたやる。時には厳しくしないとまた同じことをやる。」と洋子の言葉の重要性を喚起する発言をします。子どもたちは、順一にとって洋子の言葉がどんな意味をもっていたのか、もう一度考え始めます。子どもたちは、自分たちの力で探りながら話し合いを進めていました。

◇授業が終わってみれば、もう一歩本時の主題に迫りきれなかったという反省がありました。しかし、大事なことは「子どもたちの力で話し合いが進められた」ということです。一つのテーマについて、集団で思考をすることができるといえる学習集団が形成されているということです。

個に目を向ければ、友達の考えを聞き、参考にしながら自分の考えを述べています。それを集団として見直す、個の考えが次々と出されるなかで、一人の考えだけでは生み出していない、多様性や深さを生み出しているのがわかります。一人の意見が他の子を刺激し、その刺激を受けた子がさらに他の子の考えを生んでいく。そんな姿が見られました。

教室という場にたまたま集まった子どもたちが、共に学び合う仲間意識」と「学び合う技術」を身につけていったとき、このような学習集団が生まれてくるのだと思います。このような集団が一度できあがると、子どもたちの問題意識にあつた問いに出合えば、どの教科でも活発な話し合いが行われるようになります。

これからの授業が楽しみななってきました。
◇教師の熱い思いが見えてくる学級もありました。三年の安齋久裕学級です。教室背面の掲示物。子どもたちの作文（日記？）が並んで掲示されています。その中で一枚だけ二行しか書いてない作文がありました。（後で聞く）と外国からの転入でまだ文字を書くことが十分にできないとのことでした。）

その二行の作文に、教師がその何倍ものコメントを書き込んでいました。思わずこのコメントを写し取ってしまいました。教師としての熱い思い、確かな教育観が伝わってきました。

